

## 福岡藩の玄界灘沿岸警備と遠見番所

岡 寺 良

はじめに

江戸時代は、天下泰平の時代とはよく言うものの、本当にそのような穏やかな時代だったのだろうか。確かに元和年間以降、徳川政権による安定した秩序の下に政権運営がなされたのは周知の事実である。「世の中が治まり、見た目穏やかな様」という意味では、江戸時代は「天下泰平」の時代といえよう。

しかしながら、「天下泰平」には「何の心配事もなく、のんびりしているさま」という意味もあり、必ずしも江戸時代はそのような悠長なことを言っている場合ではない状況が続いていたのである。

寛永十四年（一六三七）に勃発した島原・天草一揆を何とか鎮圧した幕府は、これ以上キリシタンが増えることを恐れ、さらなる禁教を行うため、ポルトガル船の来航を禁じ、日葡関係は最悪となった。幕府はポルトガル船来航に備え、各藩に遠見番所と定番の設置、さらには番船による巡視を義務付けた。その後、中国・オランダの密貿易船を取り締まる意味合いも加わり、幕末に至るとロシア・アメリカなどの異国船を監視するという役割も出てきたことにより、江戸時代を通じ、遠見番による沿岸警備が続けられたのである。福岡藩においても『黒田統家譜』によると、寛永十七年に領内沿岸部

に遠見番所が設置されており、少なくとも幕末の嘉永年間までは存続していた。

福岡県教育委員会において実施した福岡県中近世城館遺跡等詳細分布調査では、遠見番所をはじめとして、烽火台、台場などの近世の海防施設もその対象とし、現地調査や文献調査の成果を踏まえ、福岡県内における概要を報告した（福岡県教育委員会 二〇一七）。また、その成果を公表した展覧会「幕末の城―近世の沿岸警備と幕末城郭―」を実施するにあたり、分布調査において調査しきれなかった玄界遠見番所など、新たな成果を盛り込んだ（九州歴史資料館 二〇一八）。これまで文献上でしか認識されてこなかった遠見番所が、考古学的な遺跡としてようやく認識することができるようになってきたのである。

宗像市においても、大島と地島に福岡藩の遠見番所が置かれていたため、宗像市の歴史を考える上でも非常に重要な要素ととらえ、本稿では宗像市内に所在する遠見番所をはじめ、福岡藩の遠見番所について概要を報告し、福岡藩における沿岸警備について若干の考察を加えることとしたい。

## 一、福岡藩の遠見番所

先述したとおり、福岡藩に遠見番所が設置されたのは、寛永十七年である。『黒田統家譜』には、

此時より九州海鳴々に番所を立て、異船が来るをうかがひ望しめられる。これに依て筑前の内にも姫島・西浦・相島・大嶋・岩屋右五ヶ所、両使の見立にて番所を構へられ、定番の士を遣し、足輕を差添をかる。右之外地嶋にも定番をかる。於呂島・白嶋・沖嶋にも番船をつかハして、毎日巡見せしめられる。又嶋々定番の外にも家老・中老の家人馬乗分の者を加番として差遣し、其上に四月より九月までの間ハ、大身の士を毎月三度宛差出され、海上を乗廻り嶋々を見せしめられる。後正保二年に西浦の番所を玄界嶋にうつさる。又芥屋浦に番所を立大嶋に番所を立そへ、脇浦・沖島に番所を

と記す。すなわち、寛永年間に姫島(糸島市)、西ノ浦(福岡市西区)、相島(新宮町)、大島(宗像市)、岩屋(北九州市若松区)の五ヶ所が設置、後、正保二年(一六四五)に西ノ浦の番所を玄界島(福岡市西区)に移し、さらに芥屋(糸島市)、脇ノ浦(北九州市若松区)、沖ノ島(宗像市)にも設置、大島にも立て添えた(増設した)ことがわかる。

また、嘉永七年(一八五四)に書かれた『浦嶋遠見番所灯籠堂急用丸囲上屋共図』(林(美)文書・九州歴史資料館所蔵)には、改修された遠見番所に用いられた資材が、建物図面と共に書かれており、そこにはこれまでに登場した相島(藍嶋)、大島(大嶋)、岩屋、玄界、姫島(姫嶋)、芥屋、脇浦に加え、地島(宗像市)、小田崎(北九州市若松区)、名古屋崎(北九州市戸畑区)の合計十ヶ所が掲載さ

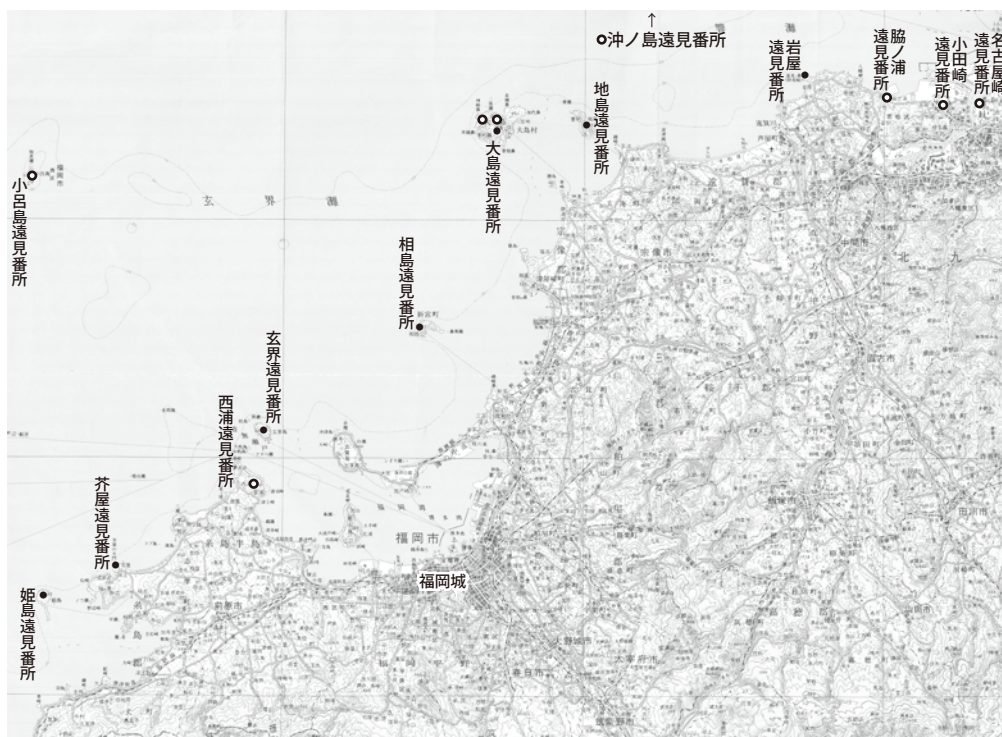
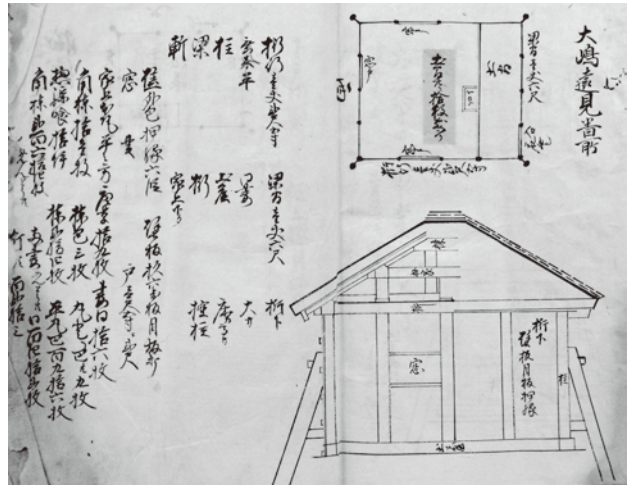


図1 福岡藩の遠見番所位置図 (●…場所が明確なもの、○…場所が不明確なもの)  
(国土地理院 1/200,000 地形図「福岡」を改変して作成)

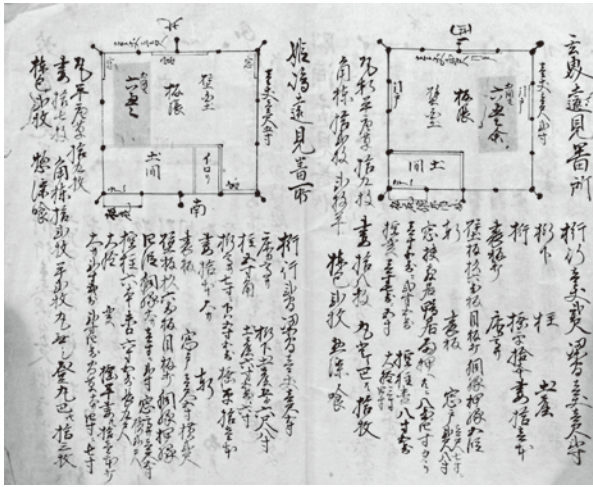




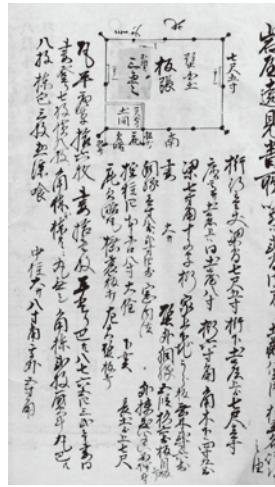
藍嶋遠見番所



大嶋遠見番所



姫嶋遠見番所



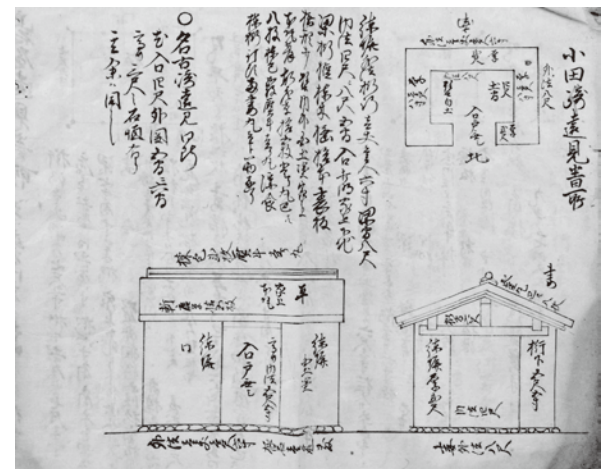
岩屋遠見番所



地嶋遠見番所



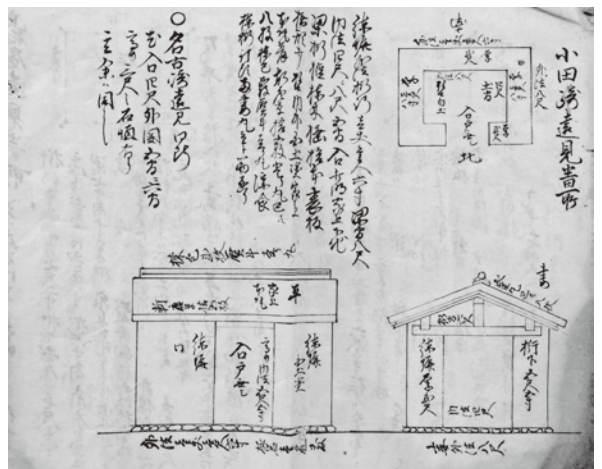
脇浦遠見番所



小田嶋遠見番所



芥屋遠見番所



名古屋遠見番所

写真1 『浦嶋遠見番所灯籠堂急用丸圍上屋共図』に描かれた福岡藩の遠見番所 (九州歴史資料館所蔵・林(美)文書)

れている(写真1)。

よって、福岡藩の遠見番所は、『浦嶋遠見番所灯籠堂急用丸囲上屋共図』に掲載された十ヶ所に加え、西ノ浦、沖ノ島の二ヶ所、さらには正保の筑前国絵図等には小呂島にも遠見番所が描かれており、これらを合わせると、合計十三ヶ所である(図1)。

## 二、遠見番所の現況

福岡藩が設置した遠見番所のうち、分布調査やその後の調査において、筆者は沖ノ島、小呂島、西ノ浦と、港湾開発により消滅したものの以外については、現地を全て確認した。

現地にて遺構・遺物が確認できなかった、あるいはもうできないであろうものについて、以下に列挙する。

名古屋崎遠見番所は、名古屋崎の岬自体が新日鉄の工業地帯となっており、全く消滅したものと考えられる。また、小田崎遠見番所は、小田崎の旧地形は残されているものの、近代以降の高射砲台跡などが築かれたためか、遠見番所に関わる遺構や遺物を確認することはできなかった。脇ノ浦遠見番所についても、同様に、現地に遠見番所に関わる地物は確認できなかった。

ただ、これら以外の遠見番所については現地には何らかの遺構あるいは遺物を確認することができた。それらの状況について、以下に述べていきたい。

### (一) 岩屋遠見番所

岩屋遠見番所は、若松半島の西、北九州市若松区有毛の響灘に突



写真2 『筑前国絵図』(九州歴史資料館所蔵)に描かれた岩屋遠見番所

き出た遠見ノ鼻(妙見崎)にあった番所で、現在は妙見崎灯台や宿泊施設などが建っている。筑前国絵図などには、遠見ノ鼻の突端に「番所」と記され、建物が描かれている(写真2)。また、『筑前国続風土記拾遺』(以下、「拾遺」という)の「岩屋浦」の項には、「境内に遠見番所 灯籠堂 定番の土宅二区有」とある。



写真3-2 岩屋遠見番所跡推定地瓦散布状況



写真3-1 岩屋遠見番所跡推定地(灯台背後の四阿付近)

岬周辺を踏査したところ、妙見崎灯台の背後にある四阿周辺の地表に近世のものと思われる瓦片がいくつか確認することができた(写真3)。海岸線から二十m以内で、標高も数mであり、恒久施設



を置くにはやや条件が厳しく、絵図ではさらに陸地側の高地に描かれていたような印象も受けるが、現状ではここを遠見番所の跡地とするのが妥当と考えている。

## (二) 地島遠見番所

宗像市の地島の遠見番所については、「拾遺」に「泊（島の南側にある集落）の良（北東）の高峰頂に遠見番所有。常に異国船の斥候に備らる」と書かれている。島の最高所である遠見山山頂（標高一八六m）は、泊集落の北北西にあたり、文書記載とやや齟齬をきたしているが、「遠見」がついた山の名称や地元の伝承、さらには筑前国絵図にも「番所」の記載はないものの、建物が描かれていることから（写真4）、そこが遠見番所が置かれていた場所と認識できる。現地は世界遺産・沖ノ島が見える展望所として散策コースの一角ともなっているが、その展望所の周囲には、近世の巴文軒丸瓦を含む

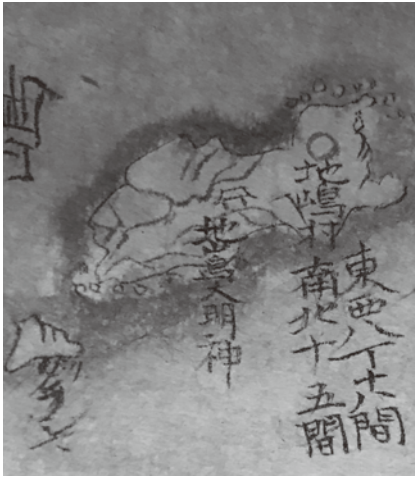


写真4 『筑前国絵図』（九州歴史資料館所蔵）に描かれた地島遠見番所の建物

多くの瓦片が散布している（写真5）。その瓦が分布する展望所となっている山頂は、一辺約十m弱の方形の平坦面となっており、周囲にも人工的に造成され

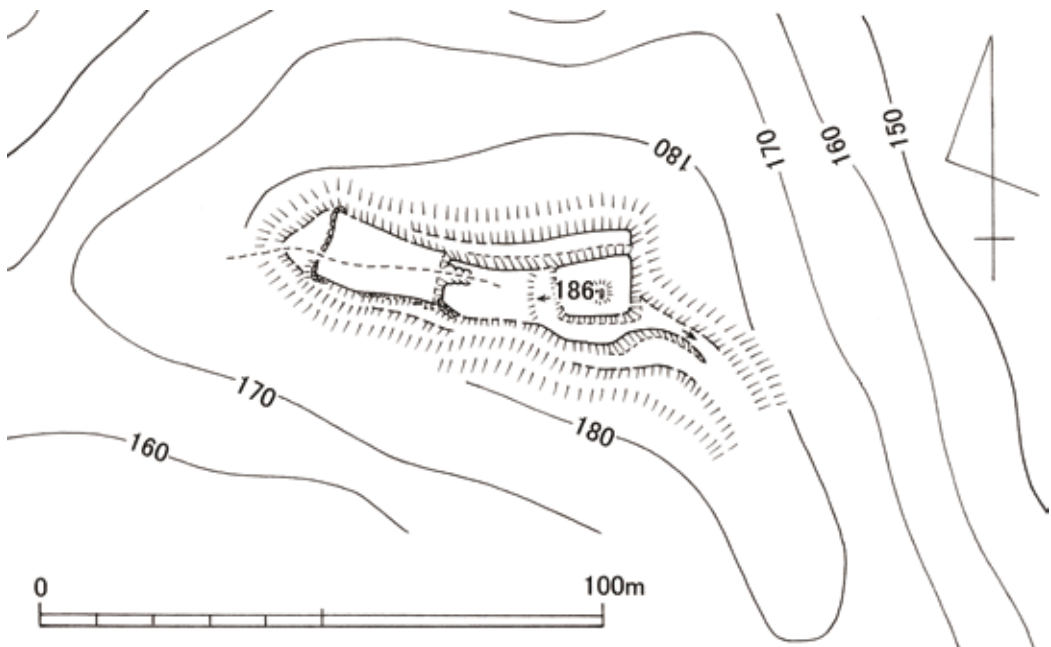


図2 地島遠見番所跡平面図（福岡県教育委員会 2017）



写真5 地島遠見番所瓦散布状況



写真6 地島遠見番所石垣



写真7 大島遠見番所跡周辺の散布瓦

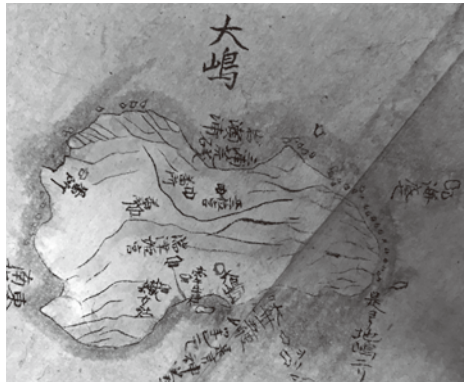


写真8 『筑前国絵図』（九州歴史資料館所蔵）に描かれた大島遠見番所の建物

たテラス面も確認できる(図2)。さらにはその西側にも尾根地形に沿う形で一辺十〜二十mの平坦面二面が造成されていて、石垣なども所々に築かれている(写真6)。山頂の南東側にも細い造成面が斜面下方に向けて何段か築かれているが、畑耕作地などの後世の改変地形の可能性が考えられる。散布する丸瓦はコビキB技法(鉄線挽き)のものも見られ、確認できた軒丸瓦は、中心から外へ右向きに広がる三巴文に十二個の珠文を持つ近世通有の瓦当文様のものである。瓦は山頂部の方形平坦面周辺以外にはほとんど確認することができず、おそらく山頂部の方形平坦面に瓦葺の番所小屋が立てられていたものと考えられる。

### (三) 大島遠見番所

福岡県最大の島である宗像市の大島に所在する遠見番所で、「拾

遺」の大島の御岳神社の項に、「御社の前に遠見番所有。國君より常に斥候を置いて、異国船の漂流に備へらる」とある。すなわち島内最高所の御岳山頂(標高二一四m)にある御嶽神社の前にあつたということである。現在、神社の前は道路や展望台によって大きく改変されており、詳細を知ることができない。しかし、現地を踏査したところ、近年改修された展望台周辺の地表に時期不明ながら近世に遡る可能性のある瓦片がいくつか確認された(写真7)。御嶽神社の背後にも、現在の社殿の前に建てられた社殿に葺かれていた瓦が大量に散布しているが、これとは明らかに離れており、また瓦も異なる種類のものであるため、念のため、遠見番所に関連する遺物の可能性として指摘しておきたい。

また、筑前国絵図には、島内に三ヶ所もの番所の建物が描かれている(写真8)。うち最も南側に位置する一ヶ所は御岳山頂のもので

ある。その北側と北西側にもそれぞれ一ヶ所ずつ番所が描かれている。「拾遺」には、「嶋の北壹里に岩瀬といふ所有。卒徒の番宅あり。又嶋の西壹里に津和瀬といふ所にも、卒徒をおかる。共に異船の漂流を察せしめられる」とあり、これらの番所を指しているものと考えられる。それらについても現地踏査を試みた。津和瀬の番所は、大島灯台から上る尾根筋の標高約九〇mの頂部と想定されるが、そこは嚴重に管理された私有地であり、現地を確認することができなかった。また、岩瀬の番所は、近代以降の大島砲台の南側、標高一六三mの三角点のある頂部と想定されるが、そこは大島砲台に関連する構築物が認められ、残念ながら遠見番所に関連する遺構、遺物を見ることはできなかった。高台にあるとも限らないため、今後さらなる資料を期待したい。

なお、先述したように『黒田統家譜』には正保二年（あるいはそれ以降）に「大嶋に番所を立そへ」とあり、この時に一ヶ所であったものが複数箇所になったものと考えられる。ただ、『浦嶋遠見番所灯籠堂急用丸囲上屋共図』が描かれた嘉永七年（一八五四）には大島番所は一ヶ所になっていることから、幕末期には一ヶ所に減らされているか、いわゆる番士宅の扱いになっている可能性が考えられる。

#### (四) 沖ノ島遠見番所

沖ノ島の遠見番所については、筑前国絵図に島の南西麓に描かれており（写真9）、「拾遺」には「嶋の南の磯に嶋番の宅有。卒徒数人を差て島中を監守せしめらる」とある。これについては、沖ノ島

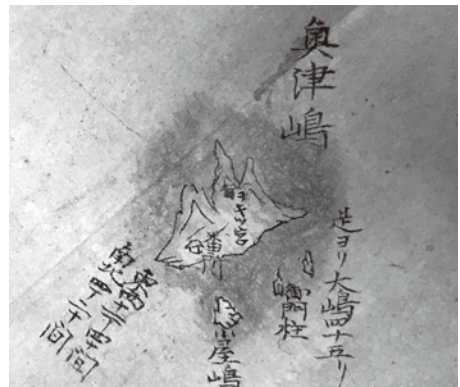


写真9 『筑前国絵図』（九州歴史資料館所蔵）に描かれた沖ノ島遠見番所

らないという。しかし、戦後に崩落を起こしたため、現在は旧状を知ることが難しい。近世の採集遺物も精査されていないため、不明と言わざるを得ない。一度現地を確認したいところではあるが、いまだ機会を得ないままである。

#### (五) 相島遠見番所（図3）

相島遠見番所は、相島の最高所で西端に位置する高山山頂（標高七七m）に位置する。現在、相島灯台と三角点とのすぐ横に「物見櫓」と呼ばれる一〇m弱×二〜三m、高さ三mほどの石垣で築かれた高台遺構が残されている（写真10）。天端の石垣が北から南へ（写真の左から右へ）スロープ状に上っており、伝承のとおり「物見台」だと考えられる。この近辺にも石垣が確認できる。ただ、周辺一帯は現在も果樹園や畑となっており、後世の改変がなされている可能



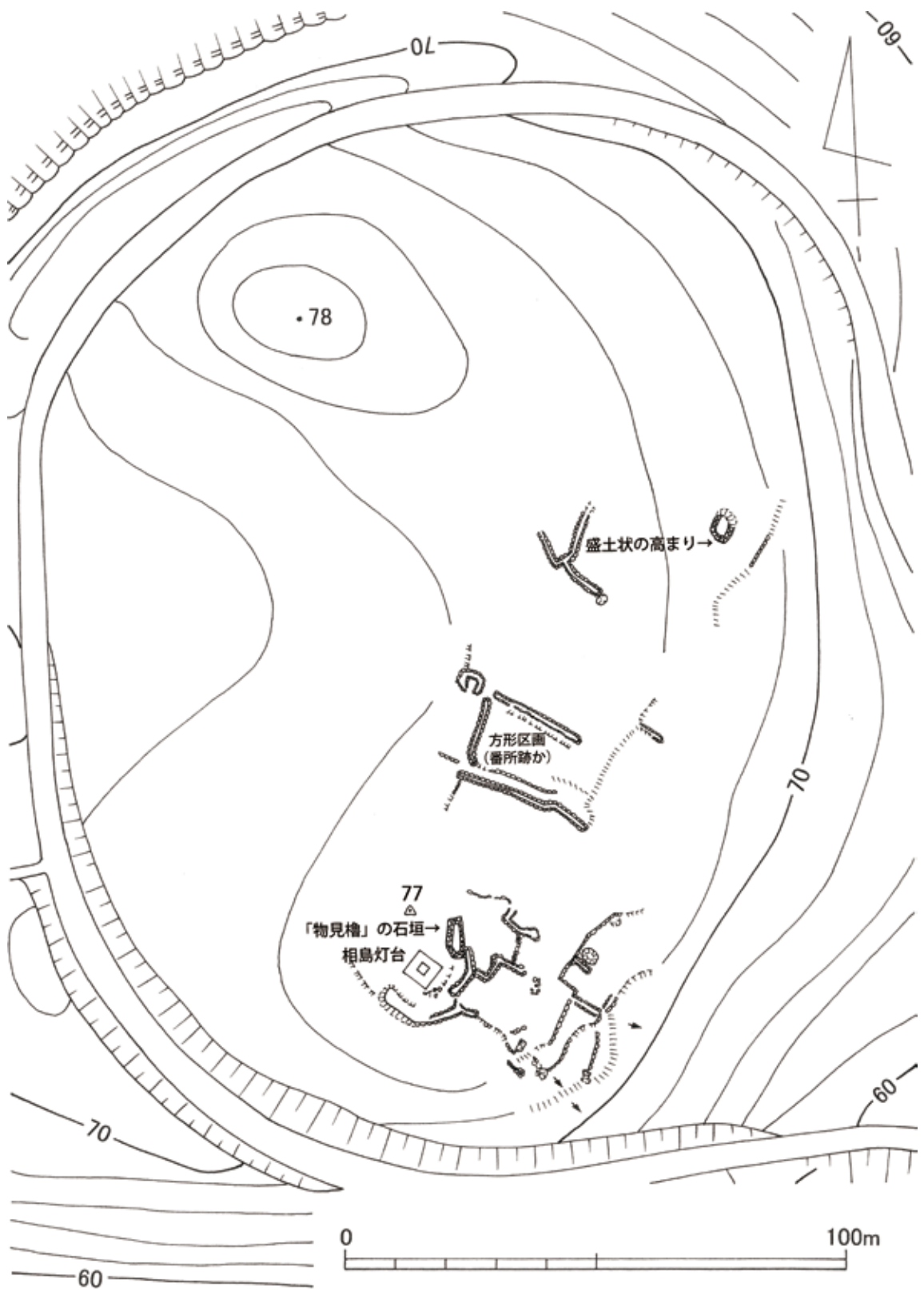


図3 相島遠見番所平面図 (福岡県教育委員会 2017)





写真10 相島遠見番所の「物見櫓」の石垣



写真11 相島遠見番所に散布する瓦・陶磁器

性が高く、すべて遠見番所に関連する遺構ではないと考えられ、その識別は非常に難しい。しかし、「物見櫓」の北側には一辺約15mの石垣で囲まれた方形区画があつて、江戸時代の巴文軒丸瓦や近世陶磁が散布しており(写真11)、この区画内に番所小屋が置かれていた可能性は高い。またさらに北側にも不自然な盛土状の高まりなどもあり、番所との関連を窺わせる。

この相島遠見番所は、現状において、福岡藩の遠見番所の中でもかなり遺構が認識できる番所であろう。

#### (六) 玄界遠見番所<sup>(4)</sup>

博多湾の入口の北、玄界島(福岡市西区)の最高所である遠見山山頂(標高二一八m)に位置する(図4)。山頂部には、一辺10m弱の石垣で囲まれた檀状の方形区画(図中A・写真12)があり、その



写真12 玄界遠見番所跡の方形石垣区画



写真13 玄界遠見番所跡の瓦散布状況

南側にも石垣で囲まれた長方形区画が認められる。その周辺にも石垣遺構が多数確認できるが、近年まで耕作していた痕跡もあつて、どこまでが遠見番所に関わる遺構かを確認するのは難しい。しかし、山頂を中心とする一帯には、近世の瓦が大量に集積しており(写真13)、中には福岡藩黒田家の家紋である藤巴文の軒丸瓦(写真14-1)やそれとセットになると思われる「今宿」姓のスタンプが押された藤花文の軒平瓦(写真14-5)なども確認できる。これらは福岡城など、福岡藩の公的施設や藩が寄進・奉納した寺社にしか確認できないものであり、福岡藩の公的施設である遠見番所に用いられた瓦と考えて差し支えない。さらには、慶長期頃まで遡る可能性のある桐文軒平瓦もあり(写真14-6)、玄界遠見番所が最初に設置



写真 15 玄界遠見番所跡に散布する軒平瓦  
(一番下は写真 14-5 に同じ)



写真 14 玄界遠見番所跡採集軒瓦  
(福岡市埋蔵文化財センター所蔵)

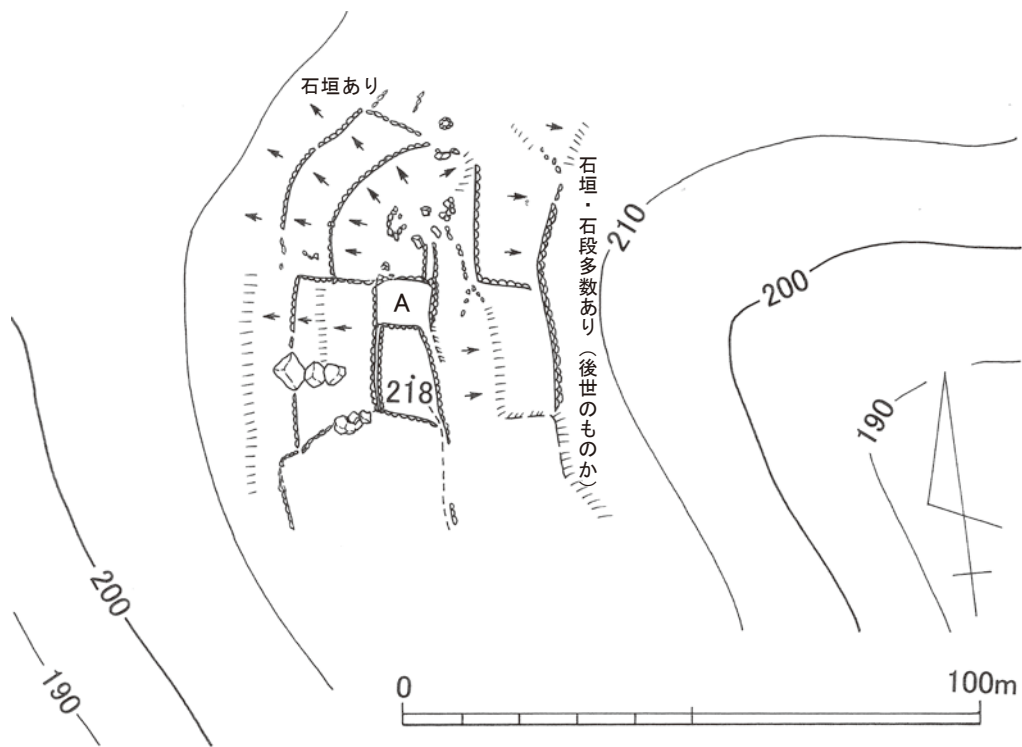


図 4 玄界遠見番所跡平面図 (岡寺作成)



写真16 『筑前国絵図』（九州歴史資料館所蔵）に描かれた芥屋遠見番所



写真17 芥屋遠見番所跡（左奥に玄界島が見える）

された正保年間よりも古い瓦が含まれている。福岡城などで使用していた瓦を、遠見番所に転用したものであろうか。

また、今回採集していないが、写真14の瓦の他にも様々な瓦当文様の瓦も多数確認できた（写真15）。これら散布する瓦は一時期に使用されたものと考えるよりは、何度か建て替えるたびに葺き替えられた集積であろう。

### （七）芥屋遠見番所

芥屋遠見番所は、筑前国絵図などには、糸島半島の西北端、国指定天然記念物の芥屋の大門の南側に連なる尾根上に描かれている（写真16）。「拾遺」には「大門山の南土山の峯に遠見番所有」とする。実際、芥屋の大門の南、標高約四五mの頂部は、現在も展望所となっており（写真17）、そこからは、玄界灘はもちろんのこと、

姫島、玄界島など、近隣の遠見番所のある島々を視野に収めることができる。その展望所がある場所は、五

m四方ほどの平坦地形があり、ちょうど建物が一棟くらい建つ余地がある。現地を詳細に観察したところ、石垣などの遺構は確認でき

なかったが、近世の瓦が散布していた。それらの中には、玄界遠見番所で確認されたものと、

同範あるいは同文の藤巴文軒丸瓦の破片や、それとセットになる「今宿」姓のスタンプが押された藤花文軒平瓦の破片を確認することができ（写真18）、これもまた遠見番所に用いられた瓦であると判断される。他にも、大に〇印のスタンプを押した瓦も確認されている。現在展望所がある場所に瓦葺の番所小屋が建てられていたであろう。

### （八）姫島遠見番所

糸島半島の西に浮かぶ姫島は幕末の志士を援助した野村望東尼の幽閉地としても知られる福岡藩の流刑地であった離島である。島の最高所の鎮山山頂（標高一八六m）に姫島遠見番所が置かれていたと伝わり、「拾遺」にも「嶺に遠見番所有」の記載が見られる。山頂からは芥屋、西ノ浦、玄界島などの近隣の遠見番所が置かれた場所



写真18 芥屋遠見番所跡採集軒瓦（糸島市立志摩歴史資料館所蔵）





写真 19 姫島からみた芥屋と玄界島



写真 20 姫島遠見番所跡瓦散布状況

や峇岐なども遠望することができる(写真19)。山頂一帯は、平坦な地形が広く広がっており、所々に石列などの人工的な構築物を確認することができるが、近代以降の耕作の可能性もあって、遠見番所の構築によるものと断定するには至っていない。しかしながら、山頂周辺を踏査したところ、山頂の北側斜面を中心に、近世の瓦が多く散布していた。限定的な踏査であったため、軒瓦を確認することはできなかったが、平瓦や丸瓦が多数あり(写真20)、丸瓦はコビキB技法により製作されたものであった。これらは遠見番所に用いられた瓦であるとみてよいであろう。

### 三、まとめ

以上、福岡藩の遠見番所のうち、遺物や遺構が確認できるものを中心に概説した。

まず、立地の観点から見ると、島に立地する番所と岬に立地する番所があるが、島に立地するものは、四方を見渡せるようにするためか、島の最高所に置かれたものがほとんどである。一方、岬に立地するものは、可能な限り岬の突端に置かれ、標高はあまり重視しないようである。

また、『浦嶋遠見番所灯笼堂急用丸囲上屋共図』の記載から、番所の建物は、約二〜四m四方の瓦葺きの板塀あるいは練塀で、土間、囲炉裏、板張床、窓を備えた一層構造(他の絵図には二層構造に描くものもある)という簡素ながらも耐久性を重視した構造であったことがわかるが、今回の踏査により、建物が建てられた近辺には、石垣の区画であったり、物見台と考えられる石垣で組まれた櫓(タワー)のような構築物などが残されていることが判明した。

さらに、現地には瓦や陶磁器などが散布し、瓦は遠見番所に用いられていたものと推察される。中でも、玄界遠見番所と芥屋遠見番所で確認された藤巴文軒丸瓦、藤花文軒平瓦の存在は、福岡藩の公的施設であることを示すのみならず、福岡城などで使用されていた瓦の転用などを示唆するものであり、福岡藩内の公的施設の瓦の流通を考える上で非常に興味深い資料であるといえよう。

これまで江戸時代の遠見番所は、史料上あるいは地名などでは扱われてきたものの、遺跡としての認識は、一部を除いてはほぼなかったといってもよい。ただ今回の検討により、さらに考古学的な実態をもって明らかとなってきた。

このように福岡藩の遠見番所が、考古遺跡としても認識できることから、福岡藩の玄界灘沿岸警備は単なる絵空事などではなく、ま

さしく藩内における一大事業であったといえよう。

そのような意味でも、宗像市の地島、大島、沖ノ島にあった遠見番所は、福岡藩の玄界灘沿岸警備の実態を物語る重要な遺跡であると言えるだろう。

### おわりに

福岡藩では寛永年間以降、玄界灘沿岸警備のため、沿岸部や島嶼部の各所に遠見番所を築き、その任に当たった。また、長崎有事に備えた情報伝達手段の施設として烽火台を構築、文化年間以降にも復活させている。そしてさらに文久年間には沿岸防備のために、台場(砲台)を藩内各所に構築しており、これらの施設は遠見番所同様、遺跡としてはほとんど顧みられることがなかった。今後は、これらを「近世海防遺跡」と位置付け、さらなる現地調査を進めていくことで、近世期、江戸幕府の主導の下になされた各藩における海防政策の実態を知ることができよう。そして今後は、さらなる調査とその成果の周知、そして保護がより一層必要となる。

### 「付記」

小田崎遠見番所の踏査においては原田智也氏、大島遠見番所・地島遠見番所・玄界遠見番所の踏査においては若林善満氏、芥屋遠見番所・姫島遠見番所の踏査においては河合修氏、有田和樹氏に同行いただいた。感謝したい。

### 【註】

(1) なお、『玄海町誌』(玄海町町誌編纂委員会 一九七九)には、宗像市の勝島に遠見番所があったとする記載がみられるが、これについては『筑前国統風土記拾遺』に正徳享保年間に南京参商の仲買禁止に伴い、番士を遣わした屋敷「加子屋敷」があったとする他には文献記載は見られず、いわゆる遠見番所ではないと判断される。また、『北九州市史近世』(北九州市史編纂委員会 一九九〇)には、若松浦に寛永十七年に番所を置いたとの記載があるが、これは岩屋の遠見番所を指しているものと考えられるので除外した。

(2) 写真4の絵図には、番所と思われる建物の側に「地島大明神」という記載がみられ、一見、その建物かと思われる。しかしながらこの絵図では、神社建物は必ず赤色で塗られているが、これについては赤色に塗られていないため、やはり番所の建物を描いたものと考えて差し支えないだろう。

(3) 岡寺未幾氏(福岡県世界遺産室宗像沖ノ島遺産係)の御教示による。  
(4) 他の番所の名称から考えれば、「玄界島遠見番所」と称するべきなのかもしれないが、『浦嶋遠見番所灯笼堂急用丸囲上屋共図』には「玄界遠見番所」と記されており、当時はそのように呼ばれていた可能性が高いため、そちらを採用している。

### 【参考文献】

福岡県教育委員会 二〇一七『福岡県の中近世城館跡』IV筑後地域・総括編 附：福岡県の近世台場・遠見番所・烽火台跡(福岡県中近世城館遺跡等詳細分布調査報告書四 福岡県文化財調査報告書第二六〇集)  
九州歴史資料館 二〇一八『幕末の城―近世の沿岸警備と幕末期城郭―』  
玄海町町誌編纂委員会 一九七九『玄海町誌』玄海町  
北九州市史編纂委員会 一九九〇『北九州市史 近世』北九州市

(おかでらりよう 原始・古代部会)